

Avadāna ~ Itivuttaka

高 島 寛 我

アヴダーナとは、求道者が前生に於て、佛に値ひ、種々の善業を爲し、その業果として、後生に於て、相當の覺果を得るに至る次第を説明せる説話をいうのである。従つて、その主人公が、後に佛陀となる場合は、それは本生（闍多迦）と呼ばれるのである。通常、聖弟子が證果を得るに至る因縁を前生と後生との連繋に於て語るものである。百緣經の佛譯の著者 Feer 氏はアヴダーナとはある行爲とその避け難き結果との間に存する關係を事實によりて證明する教訓であるというて居る。十二部經の第七として譬喩と譯されて居る。譬喩という語は、意味が廣くて、多くは比喩の意に解せられ易い。比喩という意味の梵語の類語を求めると、*udāharāṇa*, *dṛṣṭānta*, *upamā* (*aupamya*), *utprekṣā* 其他で、アヴダーナには、印度では、直接、この意味がなく、漢譯にて、後の時代になる程、この意味に解せられるようになったらしい。漢譯にて、十二部經の第八の如是語（巴）*itivuttaka*, 梵 *itivyuktaka* が本事（梵 *itivyuttaka*）と讀まれるにより、本來の

アヴダーナの内容が本事の方に轉じ移りて、アヴダーナが比喩（*aupamya*）の義に解されるようになったと思われる。

今その經過を考うるに立先ち、アヴダーナとイティヴッタカとの關係を見るに、巴梨の如是語經（*itivuttaka*）は法數順に集められた百十二の小經より成るものであるが、その名の *itivuttaka* は梵にて *itvyuktaka* 如是語とも、*itivyuttaka* 本事ともなり得るものであり、漢譯では多く本事の意味に解して居るので、梵語系統では多分は *itivyuttaka* として傳わったのであらう。次にアヴダーナの語義に關しては、古く、英譯法句經の七佛通誡の偈の下に、註解者の意見として、*avādāna* は *ava + dai* 「淨める」という語根から來れる語で、アヴダーナは清淨な有徳な行爲の意味で、それより轉じて、その行爲を内容とする聖話、それより、それを聞いて心を清めるその説話を指すとなり得るとするのである。彼得堡の大辭典ではアヴダーナなる語に二種あり、一は *dā, dya + aya* 「切る」という語根より來れる *avādāna* 「切斷」の意

味であり、他は *dāi, dāyati + ava* 「清める」の語根より來れる *avādāna* 「清淨な、承認された行爲」「完成された行爲」「起つた出來事」「行業」「英雄的行爲」の意味とする。又、別に *apadāna* の項に於て *dā, dadāti + apa* の語根より來れるものとし、*apadāna* を「遂行され行爲」「榮譽ある行爲」とする。以上が大辭典の大體の解釋であるが、これに對して梵文百緣經を出版したスパイエル氏はその序文に於て、*アブダーナ* (*|| アパダーナ*) を *dā, dadāti + ava or apa* とし、それより來れる *avādāna* を「切り去られたるもの」「選ばれたるもの」とし、更に「著名なる事實」特によい意味で、「赫々たる、光榮ある偉業」という意に用いられるようになったのである。しかし、佛教では、より一般的な意味が、*アブダーナ* の名をもつ説話集の一々の説話に屢々適用せられる、即ち惡業惡果さえも、ある種の*アブダーナ* の筋書を形成して居るからである。

以上がスパイエル氏の考えであるが、次に、かの印度文學史の著者であるギンテルニッツ氏は「*アブダーナ*、*アパダーナ*」なる論文に於て、この語の古典文學に於ける用例や、印度の辭典の解釋を列舉して説明し、その辭典に現われる語義を次の如く要約する。

- (一) 行爲 (*karma*)
- (二) 過去に行われた行爲 (*karmavittam, aivittam*)

- (三) 英雄的行爲 (*parākarma*) 驚異すべき行爲 (*adbhuta-karma*)
- (四) 出來事 (*itivitta*)

佛教の術語としては、佛教文學に於て、この語は業報の果をもたらず顯著な行業を述べる説話に用いられる。その行業は大抵は、大施や、自己供養の立派な偉業であるが、亦、時には惡業の場合もある。

かくして、ギ氏は種々の論述の上、最後に、*アブダーナ*、*アパダーナ* の原意は行爲 (*karma*) であると結論する。

以上諸氏の説を擧げたのであるが、*アブダーナ* の原意は、直ちに定め難きも、*アブダーナ* 文學の中心思想は、南北を通じて心の淨化 (*citta-prasāda*) であることは疑いないことと思われる。佛に對して種々の布施供養をなすも、心を清めることであることは諸所に説かれる處である。又、佛教に於ける重要な雜染清淨の術語に考え合せて少なくとも佛典用語に於ける *avādāna* の原意はもと語根 *dāi* より來れりとすることが可能であり恰當であると思われる。次に前述のギ氏の引用にある如く*アブダーナ* はイディヴツリッタと同様の意味に解せられるから、この両者が混同せられることは可能なことである。

次に漢譯に於ける意義の變遷を見るに、智度論三十三にては阿波陀那とは世間相似の柔軟淺語として、實例を擧げ、如

是語經には二種ありとし、一はイティヴッタカを指すもの如く、二は出因縁として例を擧ぐるも、その記述、明瞭に解し難い。次に成實論第一には、阿波陀那とは本末次第して説くもので經中に説くが如くである、智者の言説は次第あり、義あり解あり、散亂せしめず、是を阿波陀那と名くとする。阿波陀那を本末次第説とする根據を考うるに、清淨道論に十三頭陀の中の次第乞食支 (sāpadanacārikāṅga) の字義を解するに、

am anavakhaṇḍanan ti attho, satta apadānena sapadānam
avakhaṇḍanavīṭṭham anugharan ti vuttam hoti (Tikā
says, anavakhaṇḍanan ti avicchinḍanan nīrantarap-
pavati)

分斷とは細斷をいう、分斷を離れたるが、無分斷即ち無細斷との義である、無分斷を有するとは細斷なく家毎にというのである (註曰、無細斷とは無中斷で、無間の進行の意である)。

この解釋は西洋學者は採らないのであるが、アパダーナをかく解する説もあるのであるから本末次第して説くとは業因縁の中斷なきをいうもので、アパダーナの字義にこの意を含むを以て本末次第説と解したのかも思われる。次に伊帝曰多伽とは是れ、經の因縁及び經の次第にして若しこの二經に

して過去世にあらば伊帝曰多伽と名くというのであるが經の因縁とは第六の尼陀那を指し、經の次第とは第七の阿波陀那を指すのであるがその過去世にあるものを伊帝曰多伽とするというのである。順正理論四十四には譬喩と言うは所説の義宗を揖悟せしめんが爲に廣く多門を引いて比例開示す、長喩等の契經の所説の如し、有説には、是れ諸の菩薩を除き、餘の本行の能く所證有るを説き、所化の言を示すなりという。

この所説により、當時、アパダーナに比喩の意に解すると聖弟子等の本末因縁の意に解するとの兩説のあつたことを示す。次に本事に就ては、昔より展轉傳來せるを説き、説人を顯はさず、所説の事を談るなりと、即ち所説の事と解したことが注意すべきである。瑜伽師地論第二十五には、譬喩に由るが故に本義明淨なり、これを譬喩と名くといひ、本事に就ては諸の所有宿世相應の事義言教是を本事と名くという。同編八十一には、譬喩に由る故に隱義明了なりとし、本事とは本生を除いて前際の諸所有事を宣説するを謂うと。これ、元來、アパダーナに屬すべき聖弟子等の前際の諸所有事を本事に屬せしめたので、アパダーナを本義明淨又は隱義明了と解したのはアパダーナの字義に關聯する clear, pure, dazzling white 等の意味から來たものではなからうか、出曜の譯語と併せ考へべきである。大乘阿毘達磨集論第六には譬喩とは諸經中比況の説あるをいひ、同阿毘達磨雜集論第十一には

諸經中比況の説あり、本義をして明了を得しむる爲に諸の譬喩を説くとする。この兩書共に本義を聖弟子等前世相應事を宣説するものとする。これ全く、アブダーナを比況 (aupādaya) の意に解し、隨つて本事を聖弟子等の前世の事歴を説くものと解するに至つたので、阿波陀那の本義が伊帝日多伽に移つたと見らるべきであらう。

今この見方から梵本法華經の方便品の九部經の擧ぐる中の譬喩の原語を見るに avadāna を用いず aupamyā を用いて居ることは、この經典の特殊性を示すもので、この經典の屬する部派又は成立時期の考究に一觀點を與うるであらう。

なお、先にアブダーナ文學の中心思想は心の淨化 citā-prasāda であることを述べたが、この心の淨化と離すことの出来ないのは施與 dāna の行である。値佛して、種々の捨施供養を行じ、心の清澄悦豫を得て將來、惡趣に墜せず、覺果を得るに至る次第を前後生を通じて説明するのがアブダーナであり、各々の説話には大抵、施與の行が述べられて居る。mātsarya 慳貪が述べられて居るアブダーナは捨施の功德と對比してその罪惡が強調せらるゝに過ぎない。梵本百緣經の多くの説話の結語として、常に次の佛陀の言葉が述べられて居る。

Ayam asya deyaḍharṇo yo mamāntike citāprasā itī
 かいことが、彼れの、われへの心清淨 (悦豫) を表わすこ

この施與法である (Avadānaśataka pp. 7, 12, 22, 27, 35, 40, 46, 53, 62, 128, 133, 143, 147, 152, 157, 162, etc.)。かく心清淨と關聯して常に施捨が説かれるので、アブダーナの原意を施與と解した時代があつたのでなかつかと思ふのである。グラズマンの吠陀辭典には avatda 1) befriedigen (喜ばす) 2) beschenken (贈與する) の意味を與えて avadisiya なる可能法の用例を示す。前述の如く、avatai (清める) より來ると見るは恰當と考へるも佛典の用例としては常に vyavādāna (清淨) 3) samskleṣa (雜染) と對比せられ、單獨の avadāna の用例を未だ見ないのである。これを karmān とか kathā とかに解することは轉化した以後の意味として適當なるも語の原意としては認め難いと思ふ。

- 1' Annales du Musée Guimet, Tome 18, p. XIV.
- 2' Sacred Books of the East, vol. X, p. 51.
- 3' Böhtlingk und Roth, Sanskrit Wörterbuch, 1.
- 4' Avadānaśataka (Bibliotheca Buddhica III) p. III.
- 5' Journal of the Taisho University, Part II, p. 7.
- 6' 佛教大學々報 (昭和二十五年三月發行) 四一頁、拙稿「淨佛國土の原語について」

7' Childers; Pali-English Dictionary, p. 461.

8' Saddharmapungarika (Bibliotheca Buddhica X) p. 45.

9' Grassmann, Wörterbuch zum Rigveda, S. 587.